BOOK OF FIAT

CIAO! FIAT LIFE

「Mangiare, Cantare, Amare（食べて、歌って、愛する）」。

人生を謳歌する天才の国イタリアの価値観を表現するのに、たびたび用いられるこの言葉。

しかし、ここに「Guidare（ドライブする）」が加わらなければ、イタリアの個性は語れません。

そんなドライブ大好きなイタリアの人々に愛され続けているのがフィアット。

デザインの国で生まれたフィアットは、見るたびに笑顔になるデザインも、軽快で元気のよい走りも、

いつものドライブを快適に演出するアイデアいっぱいの利便性も、

全部そろったフレンドリーな相棒なのです。

さぁ、ココロ弾むカーライフへ。

フィアットといっしょに、CIAOなまいにちに走り出してみませんか。

HISTORY

1899

1901

1904

1925

1931

1932

1968

1999

2007

2020

それはベル・パエーゼ（美しき国）のシンボル

19世紀中頃まで小国が群雄割拠していたイタリア半島は、
1861年にサヴォイア王家のもと統一され、近代国家としての一歩を踏み出しました。
新しい国の最初の首都となったのは王家があった北部トリノ。
後年、首都はフィレンツェを経てローマに移りますが、トリノは引き続き新しいイタリアを牽引する都市でした。
その街で、元騎兵隊の士官だった初代ジョヴァンニ・アニェッリは、
貴族や企業家有志8人とともに「イタリアにも本格的な自動車産業を興そう」という構想を固めます。
その結果、1899年に設立されたのが FIAT（フィアット）でした。
FIATとは Fabbrica Italiana Automobili Torino（=トリノ・イタリア自動車製造所）の頭文字。
1900年の生産台数はわずか24台でしたが、6年後の1906年には1150台にまで生産台数を伸ばしました。
ただし、当時のイタリアでは自動車は限られた富裕層だけのものであったため、まずは輸出に力を入れました。

NUOVA 500

その後も、フィアットの挑戦は続きました。
1916年にトリノ南郊のリンゴットに工場の建設開始。
1923年に落成した工場は、地上5階建て、全長500メートルの巨大なもので、
屋上にはテストコースまで備えられたイタリア20世紀建築史上に残る画期的なビルでした。
1939年には同じ郊外のミラフィオーリに、発電所まで備えたさらに大きなファクトリーをオープン。
当時の主力車種『500（チンクエチェント）』は、
愛らしいスタイルから“トポリーノ（イタリア語でハツカネズミ）”の愛称で呼ばれるようになりました。
シンプルかつ合理的な機構の同車は世界各地で生産され、
1953年公開のアメリカ映画『ローマの休日』にも登場。
世界中で、その姿が多くの人の目にふれることになりました。
第二次世界大戦後のフィアットは、創業者の孫である“ジャンニ”ことジョヴァンニ・アニェッリ2世と、
彼を補佐するヴィットリオ・ヴァレッタによって、リアエンジンの小型車造りに活路を見出します。

500（TOPOLINO）

600

1955年誕生の『600（セイチェント）』と
1957年誕生の『Nuova 500（ヌオーヴァ チンクエチェント）』は、
イタリア人の生活を根底から変えました。
従来自分の村を出たことがなかった人たちが、
初めてより広い世界を知るきっかけになったのです。
実際に『600』のおかげで、生まれて初めて海を見たという
内陸の人は少なくありませんでした。
北部で働いた人々は買ったばかりのフィアットを運転し、南部の故郷に錦を飾りました。
さらには、戦前は限られた人のものだった自動車によるバカンスも、
フィアットは一般の人々にもたらしたのです。
やがて、戦後生まれの人たちが免許を取得するようになると
『Nuova 500』は彼らにとってリベルタ、つまり自由の象徴になりました。
夕刻、見晴らしの良いデートスポットにカップルが乗ったフィアット車が
並ぶ光景は、いまも記録映像としてたびたびテレビで放映されています。

フィアットは、さらに世界の小型車界をリードし続けました。

1969年誕生の『128』は、名設計者の名前にちなんでジャコーザ式といわれるコンパクトな前輪駆動方式を採用。

サイズからは想像できない広い室内と相まって、ドイツ系メーカーの貴重な研究対象になったという逸話が残されています。

同時にフィアットは著名デザイナーを積極的に起用し、機能美に富んだモデルを次々と送り出していきました。

1971年誕生の『127』の開発にあたっては、工業デザイナーとしても業績を残したピオ・マンズーを起用。

今日の2ボックスといわれる小型車の基本形を、いち早く世界に示しました。

また「20世紀のレオナルド・ダ・ヴィンチ」の異名をもつジョルジェット・ジウジアーロによる1980年誕生の初代『Panda(パンダ)』は、

極限まで追求したシンプルさと高い機能性で、コンパッソ・ドーロ(黄金のコンパス賞)を受賞。

さらに1998年誕生の『Multipla(ムルティプラ)』では、全長4メートル以下に6人乗車を実現するというマジックを成し遂げ、

カーデザイン界を驚かせました。

そして、2020年にイタリアでデビューした『500e(チンクエチェントイー)』では、

コンパクト・プレミアム EVという新たなカテゴリーを提示。早くも2021年のイタリア国内 EV登録台数でトップに躍り出ました。

フィアットはゼロ・エミッション &エコ・サステナブル時代を見据えた果敢なチャレンジを続けています。

128

127

PANDA

MULTIPLA

PANDA

500

さまざまなライフスタイルやシーンに合うデザインと適切なエンジニアリング、ルーミーなインテリア、そしてクオリティとプライスの最適なバランス。

120年以上にわたりブランドが培ってきたそれらは、ブレることなく現行ラインアップにも投影されています。

同時にそれこそが、フィアットが今日もイタリアで販売 No.1ブランドとして支持され続けている理由なのです。

フィアットゆかりの地、トリノの人たちは言います。

「イタリアには魅力的なスーパースポーツカーが数々ある。しかし、本当に人々と日々いっしょに暮らしてきたのはフィアットなんだ」。

イタリア人は自らの国をベル・パエーゼ(Bel Paese:美しき国)と呼びます。誇り高き彼らのまいにちを彩ってきたカーブランド、それがフィアットなのです。

500e

フィアット、すなわちイタリアなのだ！

タイトルを読んだ人から「もう少し凝ったものを考えたら」という声が聞こえてきそうだが、この表現ほど正しいものはない。
数字で示せば、2021年のイタリア国内登録台数シェアにおいて、フィアットは首位の15.33%である。つまり10台に1台以上はフィアットだ。
車種別ランキングでは1位が『Panda』、2位が『500』。『500X』も6位に入っている。人生で最初に運転したクルマがフィアット車だった、というイタリア人は少なくない。なぜなら、教習車として定番のブランドだからである。
お年寄りは「フィアットの『600』で免許をとったものよ」と懐かしく話す。1955年に誕生したこのモデルは、戦後イタリアにモータリゼーションをもたらしただけではなく、教習車としても盛んに使われたのだ。今日では『500』を導入している教習所は少なくない。ボクが知る教習所は『500』だけで少なくとも3回は新車に総入れ替えしている。なぜ?と校長に聞けば「教習所にとって、最高のアイキャッチだからさ」と教えてくれた。
免許取得後のマイカーに関していえば、1957年に誕生した『Nuova 500（ヌオーヴァ チンクエチェント）』が多くのイタリア人にとって思い出深いクルマである。ミラノでナンバープレートが奇数か偶数かによって走行できる日が決まっていた時代、知人の女性は「旦那が奇数、私が偶数の『Nuova 500』を持っていたから、取り替えっこして通勤していたわ」と懐かしむ。

ちなみにイタリアでは、あえてフィアットと言わなくても La Cinquecentoといえば『500』を、La Pandaといえば『Panda』を指す。ブランドが暮らしに根づいている証拠である。
そして、あらゆる都市にはフィアットのショールームがある。たとえ小さな村でも、販売店や指定サービス工場を見つけることができる。給油所や住居が併設していることもある。後者の場合、店にスタッフがいないと「いますぐ行くよ」と店主が上階から降りてきたりする。

また、セールスパーソンたちは愛すべきキャラクターの持ち主が多い。
ボクが知るジャンニ氏は、18歳のとき初めて乗ったフィアット『UNO（ウーノ）』に魅せられて以来、今日まで27年間第一線に立ち続け、県内最大のディーラーでトップセールスになった。他にも筆者の周囲のフィアットマンたちは、百科事典の販売員をしていたもののクルマへの熱い思いから転身したアンドレア、子ども時代に祖父の農産物屋台を手伝ううち、お客さんに喜んでもらう感動を覚えてセールスパーソンになったロベルトなど、バックグラウンドが個性的だ。だから、フィアット販売店には用がなくても、多くの人がふらっと立ち寄る。先日、新人セールスパーソンを年配の人が見守っているので、てっきり彼の上司かと思ったら、祖父つまりおじいさんが心配して様子を見に来ていたのだった。

そういえば、最近はイタリアでEV登録台数ナンバーワンの『500e』が、教習車としても使われるようになってきた。初めてのゼロ・エミッションカー体験がフィアット、という若者が誕生してゆく。かくもフィアットは、これからもイタリアで人々の生活に溶け込んでゆくのである。

文と写真

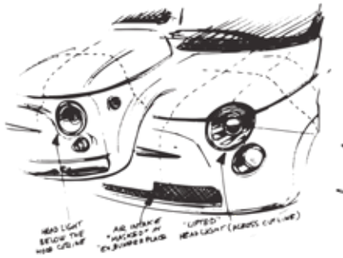
大矢アキオ　Akio Lorenzo OYA
イタリア文化コメンテーター

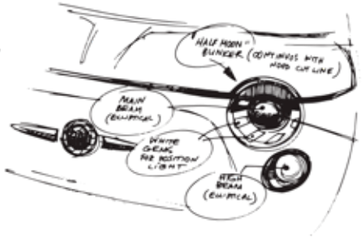
コラムニスト／イタリア文化コメンテーター。音大でヴァイオリンを専攻、大学院で芸術学を修める。二玄社「SUPER CG」編集記者を経て1996年よりシエナ在住。NHK語学テキスト、朝日新聞デジタルをはじめ数々のメディアで活躍。NHK「ラジオ深夜便」などラジオにも出演中。『Hotするイタリア』『イタリア発シアワセの秘密』（ともに二玄社）、『イタリア式クルマ生活術』（光人社）、『メトロとトランでパリめぐり』（コスミック出版）など著書・訳書多数。

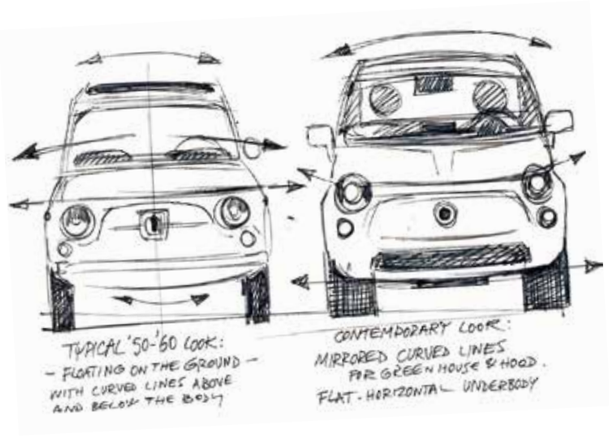
DESIGN

フィアットは「いつも彼女」

家具、キッチン用品そしてオーディオなど、イタリアン・デザインでたびたび驚かされるのは、
まるで今年発売されたかのように見えるのに、実はロングセラーであること。
フィアット車に携わる歴代デザイナーたちが、守り続けてきたことがあります。
第1に、コンパクトな外寸に最大の室内スペースを創造すること。
たとえば、フロント部分は可能なかぎり短くする。長くすれば簡単にスタイリッシュになりますが、
フィアットのデザイナーはまいにちの取り回しを考え、そうしません。
代わりに短いノーズで愛らしいフォルムという、より難しい造形的挑戦を繰り返してきました。
同時に、メカニズムの占有スペースは可能なかぎり抑えています。
いずれも1957年誕生の『Nuova 500』が確立したものを忠実に継承しているのです。

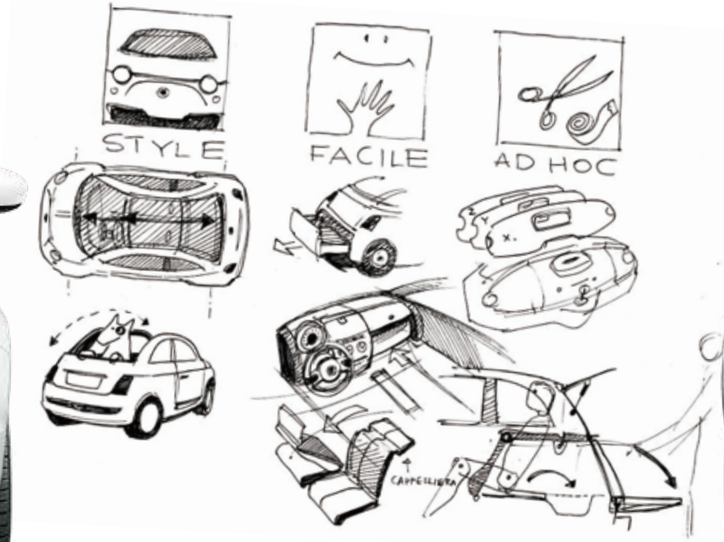


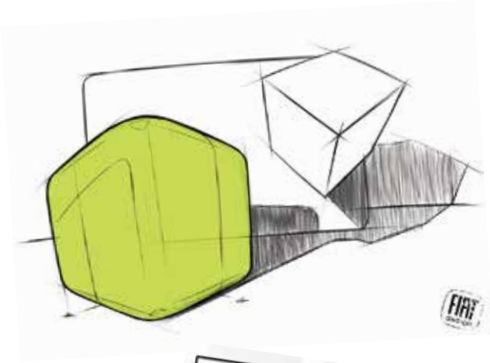




第2に、そうした歴代モデルのデザイン・ランゲージを引き継いでも、単なるリメイクではなく、時代を変える力を託すこと。
『Nuova 500』はイタリア人の移動の概念を変え、2007年誕生の『500』は21世紀のカーライフを提示しました。
最新の『500e』ではエコ・サステナビリティが求められる時代のアーバン・モビリティをいち早く指し示しています。

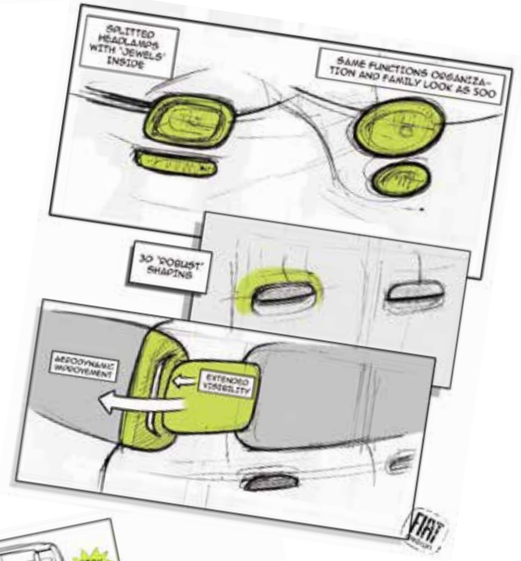
しかも『Nuova 500』のデザインの黄金比をモチーフに取り入れるなど、歴代『500』へのリスペクトも忘れていません。
さらに、アーバン SUV『500X』も『500』の特徴を受け継いでいるモデル。
丸みを帯びたヘッドライトや台形型のノーズなど『500』の親しみやすさを残しながら、
より大きく、よりパワフルな印象にデザインされています。

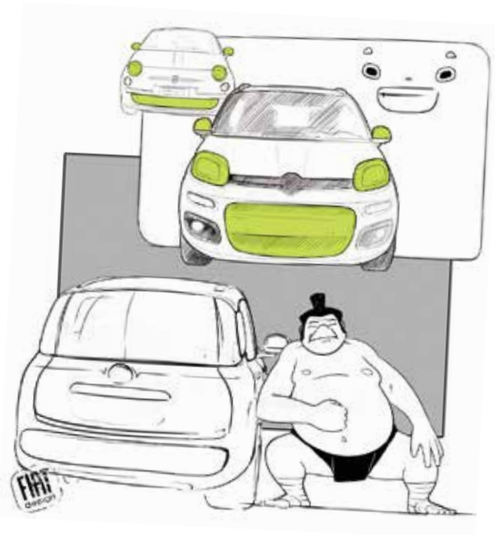


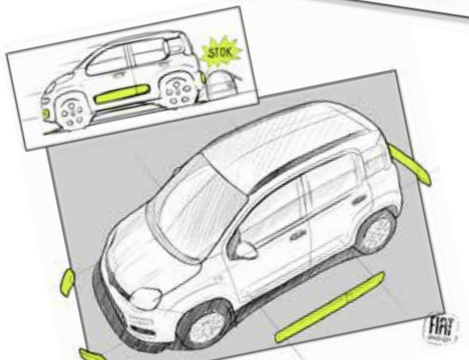


さらに、歴代『Panda』の魅力を受け継ぎながら進化した現代の『Panda』は、
四角と丸を合わせたカタチ「スクワークル」というモチーフを随所に取り入れた
個性豊かなデザインが特徴的。
メーター類やスイッチ類、インストルメントパネルのポケットなど、
使い勝手とデザイン性を併せ持っています。
また、インテリアをよく見てみると、随所に「PANDA」の文字が。
そうした遊びゴコロも、フィアットならではのデザインのポイントといえます。

第3に、長きにわたり耐えうるデザインであること。
フィアット車は、過去のモデルとなっても、古さを感じることはありません。
あるイタリア人にフィアットの魅力を聞くと「センプレ・レイだから」と即座に答えが返ってきました。
“Sempre lei” とは「いつも彼女」の意味。
なぜ彼女かといえば、イタリアでクルマを示す“macchina” が女性名詞だから。つまりフィアットは、いつまでも同じ。
40年以上前に設計された初代『Panda』が、世界の美術大学のインダストリアルデザイン・コースで
今日でも教材となっているのは、その証拠。
フィアット車のデザインは、イタリアにおける他分野の優秀なプロダクトと同様、高いレベルの永続性を備えているのです。







そして、もうひとつ。
現行『500』『500X』『Panda』のデザイン開発を率いたロベルト・ジョリートは「育った家には幼少期からフィアットがあって、
ミュージシャンだった青春時代は往年のバン『850パノラマ』にダブルベースを載せて走り回っていた」と教えてくれました。
共に育ち、日々を過ごした人が思いを込めてカタチ作ってゆく。それも、フィアット・デザインの魅力なのです。

DRIVE

キビキビは永遠に

イタリアで写真を撮ると、フィアットのクルマがかなりの確率で写り込みます。

フィアット車がこれほどまでに愛されている秘密は、まず「取り回しがしやすいサイズとデザイン」。

チェントロ・ストリコ（歴史的旧市街）にピッタリなのです。

中世そのままの狭い街路を走る際、大きなクルマでは超絶技巧を要する曲がり角を、

フィアット車が涼しい顔で走り抜ける姿は、まいにちあちこちで見かける光景。

ガレージでも同様。古い馬小屋を改造した狭い間口のガレージに、フィアットがすっぽり収まった瞬間、

知らない人が運転していても思わず拍手したくなります。

人気の理由その2は「あらゆるコンディションで、安心かつ快適であること」。

イタリアの地形は日本によく似ていて、山あり谷あり平野あり。

路面のコンディションも、古い石畳、荒いアスファルトの郊外道路、

そしてストラーダ・ビアンカといわれる砂利道までさまざま。

フィアットは、そうした変化に富んだイタリアの道で長年鍛えられてきました。

サスペンションは高いロードホールディングとコンフォートの見事なハーモニーを奏で続けます。

郊外にお屋敷を持つ人も「実は、いちばん乗るクルマはフィアット」という人が少なくありません。

なぜなら、糸杉と砂利道の先にある大きな家に辿り着くのに快適だから。

そのため、大きなクルマを持っていても、気がつけばフィアットがメインという家がたくさんあります。

「アウトストラーダ」といわれる高速道路でも、フィアットが元気に走る姿を頻繁に見かけます。

区間によって異なりますが、イタリアで主要幹線の最高速度は130km/h。無料の自動車専用道路も90km/hが大半です。

そうしたなか、上のクラスのクルマたちに引けをとらない機敏な瞬発力と十分な巡航性能で、フィアットは人々の心をつかんできました。

外国からイタリアへバカンスに来た人が、レンタカーのフィアットに乗って「小さいのに、こんなに走るとは！」と驚きの声を上げるのが頷けます。

そして最新のEV『500e』では、効率的に配置されたバッテリーの低重心を巧みに用いることで、フィアット伝統ともいえるダイレクトな操縦感覚を実現。

時代が変わっても、キビキビした走りは永遠。これこそ、フィアットの人気を支えるドライブの秘密なのです。

COMFORT

イタリアの家にようこそ

フィアットのシートにひとたび座ると、誰もが穏やかな表情になるのは、なぜでしょう?

まず、目視による後方視界の良さ。外観のインパクトを競った挙げ句、リアの確認がしづらいクルマが多いなか、

フィアットの各モデルはデザインの本道ともいえる良心的な見晴らしが特徴的です。

まいにちが楽しくなる秘密は、ドライビングポジションにも。『Panda』は高めの着座位置のおかげで、

どの世代の人でも、どのような体型の人でも乗り降りがしやすく、

かつ街中でも運転がラクとイタリアをはじめ、ヨーロッパ各地でも好評です。

『500』シリーズは「ゴーカートのような」と評される操縦感覚が最大に楽しめる絶妙な位置にシートが設置されています。

必要なテクノロジーを優しいインターフェイスと組み合わせているのも、フィアットに乗った人がにこやかになる秘密のひとつ。

インフォテインメントシステム「U-Connect®」のタッチパネルモニター*は、Apple CarPlayや Android Autoと連携。

普段使っているスマートフォンと同じ感覚でオーディオやハンズフリーフォンを操作できます。

手に触れる部分のデザインは、いずれも人間工学に基づいた曲線で構成。さらに、最新の『500e』では

最先端の電気自動車にもかかわらず、スイッチ類は限りなく少なくすることをデザイナーたちは目指しました。

イタリアでフィアットの熟練セールスパーソンは、こう表現します。

「すべての人が宇宙船のようなスイッチを求めているとは限りません。

だから、フィアットはこの国でナンバーワンのブランドなのです」。

＊ 500e、500、500C、500Xに装備

長年のフィアットファンを唸らせる演出も。『Panda』の助手席前ラック（物入れ）は、それを最初に採用した初代へのオマージュ 、

そして『500』『500X』『500e』のワイドに広がる楕円形のインストルメントパネルは、

多くの人がいまも懐かしむ『Nuova 500』へのオマージュです。

インテリアのマテリアルやテキスタイルのセンスも、思わず笑顔が浮かぶ理由。

それらは、モデルごとに社内デザイナーと外部スペシャリストの綿密なコラボレーションによる成果といえます。

彼らの根底にある感覚は、イタリア家庭で家具や調度品選びをするときの基準と似ています。

重要なのは、いま美しいだけではなく、長きにわたって褪せることがない魅力を備えていること。

そうしてできあがった部屋を、イタリア人は友達がやってくるたび誇らしげに披露します。

フィアットのインテリアも同じ。きっと、オーナーになったとき、あなたも仲間に見せたくなることでしょう。

TECHNOLOGY

魅力の秘密は熟成と先進

「間違いなく、モトーレ・フィアット（Motore Fiat：フィアットのエンジン）だ！」。
これは、過去のフィアット車から新しいフィアット車へと乗り継いだイタリア人からよく聞く言葉。
もちろん彼らの顔には、ちょっぴり笑みが浮かんでいます。まいにちのタウンユースから休日の郊外クルージングまで、
どの回転域でも気持ちよく回り続けるエンジンは、フィアットブランドの伝統。
加えて、耐久性やメンテナンス性への配慮もフィアットが人々から支持されている理由なのです。

『500』に搭載されている直列 4気筒 1.2リットルエンジンは、
フィアットが三十数年にわたって、熟成と改良を重ねてきたユニット。
滑らかで柔軟性に富んだエンジンフィールは、多くのファンを惹きつけてやみません。

また『Panda』と『500』に組み合わされている TwinAirエンジン（直列 2気筒 875cc インタークーラー付ターボ）は
欧州におけるダウンサイジングの先鞭をつけ、発表後すぐに「インターナショナル・エンジン・オブ・ザ・イヤー2011」を受賞。
独自の可変バルブタイミング機構「マルチエア」も採用した排気量 875ccとは思えない豊かなトルクは、
人々から驚きの声をもって讃えられています。
なお『500X』の直列 4気筒 1.3リットル・インタークーラー付ターボエンジンはオールアルミ製。
こちらも TwinAirエンジン同様「マルチエア」を採用しています。

フィアットならではの気持ちよい走りの追求は、電気自動車の『500e』も同じ。
最高出力 118ps、最大トルク 220Nmのモーター、0-100km/h加速 9秒、
そして一充電あたり走行距離 335km（WLTCモード）と、
いずれも数ある欧州製シティ&コンパクトクラス EVのなかでも際立ったスペックを実現しています。

もちろん、乗員を守る技術も惜しみなく注がれています。
日本導入のフィアット車は前席左右、側面、そしてウィンドーのエアバッグを標準装備。
加えて『500』『500X』には乗員の下肢部を衝撃から守るニーエアバッグも装着。
また『500X』『500e』には、アダプティブクルーズコントロール（一部モデルを除く）、
衝突軽減ブレーキ、レーンデパーチャーウォーニング（『500e』はレーンキーピングアシスト）などの
先進安全装備（ADAS）が搭載されています。

フィアットのチャームポイントは、センスのよいエクステリア&インテリアだけではありません。
イタリア流の熟成と進取の気性、そして人への優しさに基づいたテクノロジーも魅力なのです。

SUSTAINABLE

そのまま、地球への優しさ

サステナビリティ（持続可能性）も、フィアットを表現する大切なキーワード。

1974年 10月のトリノ・モーターショーに登場したコンセプトモデル『X1/23』や、1990年に誕生した『Panda Elettra（パンダ・エレットラ）』など、

フィアットは 40年以上も前から EV（電気自動車）の開発や製品化を続けてきました。

そして現在、フル EVの『500e』は、2021年に環境性能を評価する「GreenNCAP」で、満点の 5つ星に輝きました。

空気汚染の少なさ、エネルギー効率の高さ、地球温暖化ガスの排出量の少なさで、いずれも最高のレーティングを獲得した結果です。

『500e』は使用しているマテリアルにも細心の配慮がなされています。

たとえば、ファブリックシートに使用している SEAQUAL™は、海洋・陸上双方から回収したプラスチックで生成したポリエステルを採用。

なお、レザーシートにはエコレザーを使用しています。

もちろん、ガソリンエンジンでも環境負荷の低減を実践しているフィアット。

『500』に搭載されている 1.2リットルの 4気筒 FIREエンジンは本来の軽量性に加え、

たゆまぬアップデートによって時代が求める高効率と省燃費を実現してきました。

また『Panda』や『500』の TwinAirエンジンは極めてコンパクトな 2気筒 875ccながら、

僅か 1900rpmで最大トルク 145Nmを発生する、こちらも効率性に優れたユニット。

アイドリングストップ機能の START&STOPシステムも装備されています。

フィアットは、ファクトリーでも高い環境性能を目指しています。

その代表であるミラフィオーリ工場では、総面積 12万平方メートルにおよぶソーラーパネルを設置し、

15メガワットを発電するプロジェクトがスタート。5千トンの CO_2排出量削減に貢献しています。（2020年 2月現在）

さらなるユニークな貢献も。トリノに 2021年秋オープンした「ラ・ピスタ 500」は、

1923年に操業を開始した旧リンゴット工場ビルの屋上に残っていた 1周 1.2キロメートルのテストコースを、

300種類・約 4万本の植物で覆い、地上 28メートルにヨーロッパ最大級の空中庭園を生み出しました。

工場時代は人々に仕事を創出し、誰もが買えるクルマを生産して、イタリアの暮らしを変えた歴史的建造物。

それを時代に即したスタイルに再生することで、再度ブランドの故郷となっているのです。

さまざまな形でサステナビリティを実践しているフィアット。

ステアリングを握るあなたの姿は、そのまま地球への優しさを表しています。

LINE UP

見るたびに、乗るたびに、笑顔があふれるフィアットのクルマたち。
好みによって、ライフスタイルに合わせて選べる、
個性豊かなモデルをラインアップしています。

500e

500

500C

500X SPORT

500X CROSS

PANDA

※写真の仕様は、2022年6月現在のものとなります。

500e LIFE

500 LIFE

新たなスタートのアイコンとして　500e OPEN　バーリー＆ナイル・オトゥール夫妻

イタリア屈指の高級ワインの産地として知られるモンテプルチャーノ。
バーリー＆ナイル夫妻は、アグリトゥリズモ(農園民宿)のオーナーである。
現在、ふたりの日常の足は『500e』である。「最新テクノロジーには、常に興味がありますね。500e は間違いなく、フィアットにおけるひとつのマイルストーンです」と夫のナイルさんは購入の理由を説明。
一方、妻のバーリーさんは「スタイルが可愛い 500 に、いつか乗ってみたいと思っていました」と語る。そして「500e の購入の決め手は、他の多くの EV よりもコンパクトであること。イタリアの細く曲がりくねった道を運転するのに、とても便利ですからね」と話してくれました。

インド出身のバーリーさんと、アイルランド出身のナイルさんは、共に法人を得意とする弁護士。中東ドバイの世界的法律事務所で知り合ったふたりは、イタリアに移住することを決意。

そして 2021年、モンテプルチャーノで 1834 年に歴史を遡る農園を、ほぼひと目惚れで手に入れたそう。
また、2022 年には昨秋収穫したブドウで初めてのワインも出荷するとのこと。「子供の頃、農園を手伝ったことはありましたが、この農園はまったくの手探りで始めました」とナイルさん。
そして「数百エーカーもあるような巨大農園に、私たちは興味がありません。たとえ小さくてもカーボンニュートラルな農園を造ることが夢なのです。すでに自家発電用のソーラーパネルを設置しました。トラクターといった農機もすべて電気式を採用する予定です」と語るおふたり。

そんな彼らにとって、コンパクトでエコフレンドリーな『500e』は、新たな人生とフィロソフィーの象徴といえるでしょう。

初めての500はカラーもカンペキ　500 1.2 POP　amimi さん

ルパン三世が好きだったこともあり、アニメを観ているうちにルパンが乗る『500』のことも好きになった amimi さん。
その頃から、amimi さんは「いつか 500 に乗る！」と決めていたそうです。
その想いは変わることなく、初めて購入したクルマがミント グリーンの『500』。「最初は、ルパンと同じイエローの 500 が気になったんですけれど、私はミント グリーンがすごく好きで。財布もキーケースもミント グリーンなので、この色を見た瞬間にひと目惚れしました」。

お気に入りのポイントは「外見のコロッとしたところ。それと、ボディカラーと同色のインストルメントパネルですね」と、デザイン性に惚れ込んでいるよう。
「500 に乗ることは、昔からの念願だったので、まいにちうれしくて楽しいです」と『500』への想いを語ってくれました。

そんな amimi さんは仕事の傍ら、ダンサーとしても活動中。
「ダンスの練習場所への移動では、これから踊りたい曲などを聴きながらイメージトレーニングをしたり、振りを考えたり。音楽は何でも聴きますが、昭和の歌謡曲が好きでよく聴いています（笑）」。

ぼぼまいにち『500』をドライブしているという amimi さん。
「とても快調です。小さいけれど安定感があって、車内も意外と広くて快適なんです。坂道を上るときなどは、自分でシフトチェンジをして楽しんでいます」とパフォーマンスにもご満悦とのこと。
「いつか、500 と海に行きたいですね。これから、もっとたくさんの思い出を 500 と共有していきたいです」。
amimi さんと『500』のカーライフは、いつまでもよろこびのビートを刻み続けることでしょう。

500X LIFE

愛犬との暮らしにフィットする500X

500X CROSS　アツシさん・ミキさんご夫婦

『500』から『500X』へ乗り継いできたというアツシさんとミキさんご夫妻。愛犬のルークくんといっしょに、家族みんなでフィアットライフを楽しんでいるそうです。

『500X』購入のきっかけは、転勤先の長野県から東京に戻ってきたときのこと。

『500』よりひと回り大きなクルマを探していたとき、白羽の矢が立ったのが『500X』。

「デザインとサイズ感に惹かれました」とアツシさん。一方、もともと『500』に憧れてオーナーになったミキさんは「夫が 500X を選んだときはビックリしました。私と趣味が似てきたなぁと感じています（笑）」と話してくれました。

また「長距離の運転も疲れにくいです。車高が高くて見通しがよく、運転しやすいことにも満足しています。他のクルマとは運転感覚が違って、すごく楽しいんです」と『500X』の魅力を語ってくれました。

休日にはドッグランやアウトドアなど、愛犬のルークくんといっしょに楽しめるスポットに行くことが多いとのこと。「ルークも 500X を気に入ってるみたいで、後部座席に乗ると安心してすぐに寝ています」とミキさん。ラゲッジルームもゆとりのある広さなので、愛犬とのお出かけに欠かせないペットカートが後部座席を倒さずに積めることも購入の決め手だったそうです。

「家族みんな 500X をとても気に入っているので、できるだけ長く乗りたいです。カーフェリーでクルマごと苫小牧まで行けるそうなので、いつか 500X で 1 週間ぐらい北海道をドライブしたいですね」。

アツシさんとミキさんご夫婦、愛犬ルークくん、そして『500X』とのフィアットライフは、これからもたくさんの思い出を描いていくことでしょう。

PANDA LIFE

まさに絶妙なバランス

PANDA EASY　山川さんご夫妻

商社にお勤めの山川さん。以前は、クルマへの興味は高くなかったそうですが、仕事でヨーロッパの自動車に使用するオイルなどを担当するようになり、多く輸入車に触れるうちにクルマに興味を持ったそう。

奥さまが乗っていた軽自動車が車検の時期を迎えたこともあり、ディーラーで『Panda』に試乗。「試乗した日に契約しました。即決のポイントは、TwinAir エンジン。もっと速いクルマはいっぱいありますが、キビキビ走って楽しい。日本の道路事情や環境を考えた時に『ちょうどいい』と思いました」。

奥さまは「家族 4 人で乗ることを考えると、やっぱり 5 ドア。四角っぽいデザインが好きなので Panda を選びました」と購入の理由を教えてくれました。

そして、デザイナーとして起業されている奥さまは「Panda は“自分自身を表現するもの”と言えるかもしれません」とコメント。

山川さんは「妻が乗っているところを想像した時、デザイン的に一番しっくりくるのが Panda だったんです」とご自身の興味に加えて、奥さまのことも考えてクルマ選びをされていたことを話してくれました。

「ボディサイズが、日本の道路事情にものすごく合っていますよね。狭い道も行けますし、それでいて長距離高速巡航も問題ありません。見ていても可愛いクルマです。乗り心地や走りを含めて Panda は絶妙なバランスで全部がいいんです」と山川さんは話します。

そして「以前は、家族 4 人で乗るのにもちょうど良かったんですが、子供が大きくなったこと、そして私が 181cm、妻は 171cm なので、もう少し大きなクルマをと考えたのですが、Panda 以外の候補がないんです」と山川さん。デザインにもテクノロジーにもこだわる山川さんご夫婦にとって、Panda は最も理想的な存在なのです。

Share with FIAT

この想い。つながる。ひろがる。
Share with FIAT

ますます必要とされている“シェア”の気持ち。
自分のしあわせはもちろん、みんなのしあわせを求める時代をつくっていきたい。そう考えるフィアットは「Share with FIAT」を合言葉に、女性のエンパワーメント向上、動物愛護、子供たちの教育環境の醸成、紛争や自然災害時の緊急人道支援、そして若者の育成などの社会貢献活動をサポート。フィアットは、これからも人と人との想いをつなぎ、社会にもっと笑顔をひろげる活動を支援していきます。

FIAT × MIJP

FIAT × MADE IN JAPAN PROJECT

日本の文化を結ぶ、ココロをつなぐ、
FIAT × MADE IN JAPAN PROJECT

イタリアでは「アルチザン」、日本では「職人」と呼ばれ、それぞれの優れた伝統文化とその技術を受け継ぐとともに、日常の中で実際に使われ、愛される「ものづくり」に魂を込めている人々がいます。
イタリアの「ものづくり」文化を代表するフィアットは、特別なプロジェクト FIAT × MADE IN JAPAN PROJECT を立ち上げました。
NPO法人「メイド・イン・ジャパン・プロジェクト」とのコラボレーションによって、日本の優れた伝統工芸品に新たな光をあてる活動に、これからもご注目ください。

#CIAODONNA BY FIAT

大切なあの人へ。そして私へ。
#CiaoDonna

元気で、明るく、前向きなまいにちのために、
フィアットがすべての女性にエールを送るプログラム
#ciaoDonna（チャオドンナ）。
女性のみなさんが、より輝く日々を過ごせるよう、
そしてより豊かな時間を送れるよう、
カーライフ、ファッション、ビジネスをはじめとする幅広い情報を、
記事やイベント、コミュニティなど、多彩なカタチで発信。
日本はもちろん、世界中の女性を素敵に元気に応援します。

FIAT PETS

ペットと楽しむフィアットライフ！
FIAT LOVES PETS

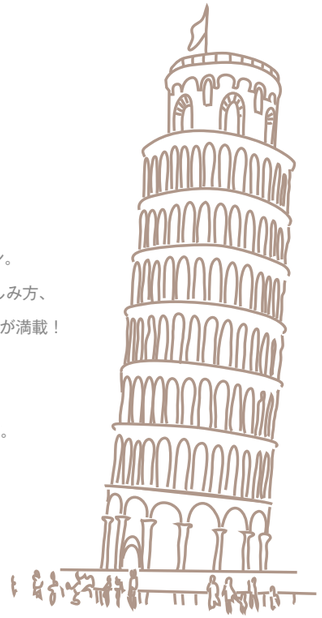
ペットとのまいにちが、もっともっと楽しくなる。
そんなカーライフを、フィアットが応援。
愛犬・愛猫との旅行やドライブスポットをはじめ、
家族みんなで楽しめる場所やおすすめの施設など、
ペットと暮らすみなさんには見逃せない情報が満載！
もちろん、ペットとのドライブに欠かせない、
おすすめグッズの情報もお届けします！

fiat magazine

CIAO!

フィアットとイタリアの情報が満載！
fiat magazine CIAO

笑顔あふれる「CIAO！なまいにち」を過ごすためのフィアット web マガジン。
新情報はもちろん、グルメやおすすめスポット、イタリア文化、フィアットの楽しみ方、
そしてオーナーインタビューなど、まいにちをもっと楽しく、もっと素敵にする情報が満載！
暮らしに役立つ、よろこびのヒントがきっと見つかる。
フィアットとのまいにちをもっと楽しみたい方、
そして自分らしいまいにちを過ごしたい方に、おすすめの web マガジンです。



FIAT 公式キャラクター

TOPO FIAT

トポ フィアット

『500』をモチーフにした「トポ フィアット」の
出身地や特徴など、詳しい情報をチェック！

TOPO FIAT 公式 LINE スタンプ

VOL.1 はコチラ

VOL.2 はコチラ

フィアット オフィシャル ソーシャルメディア

イベント、キャンペーン、最新モデルの情報などをいち早くお届けする他、
フィアットにまつわるあらゆるニュースを日々発信しています。

twitter.com/FIAT_JP

facebook.com/FiatJapan

instagram.com/fiat_jp

youtube.com/user/FIATtv

本ブランドブックの最新・訂正情報はこちらからご覧ください。

FIAT

本冊子に掲載されている写真、イラストはイメージです。実際の商品とは細部が異なる場合があります。
ボディカラーおよび内装色は、撮影、印刷条件により、実際と異なって見えることがあります。
また、記載された仕様並びに諸元、装備は、予告なく変更する場合がありますのでご了承ください。

22.06.15000

CIAO FIAT 0120 404 053

9:00AM～9:00PM（土・日・祝日も承ります）

fiat-auto.co.jp